大福

急効萬病妙藥方序

近世妙藥集ノ類ヒ行ヲ
ハ書ヲ見レ共真名字
ヲ知テ読シカタク或ハ求ル
ニ難キ藥種ヲ出シ或ハ
海濱ノ人急ニ
ヲ考テ草木土石禽獣虫
魚ヲ月前ニ
夜辛ヲ嬰ヘ
煩やすかラシ
假名字ヨ

霜妙薬方と名づけて
起死回生乃便りとも
算方として必ず
かう徒診み日久参考時は
あやまつて人を害するを
霜猫猫を時ず
良薬とあるの理を能極
知て書を再刻へ
と云千時元禄十年也
平月吉旦
棋陽急緩謹題

目錄

一中風　二疫厲
三食傷　四河豚ニ酔
五鰹ニ酔　五菌魚毒
六諸毒解　七水蛭を呑
八酒毒　九生肉食毒
十蠣の毒　十一蛇咬の茉
十一蜈蚣咬の茉　十二蜂螫ら茉
十二鼠咬の茉　十五鼠の小便目入
十六蚤刺の茉　十七馬ま咬茉
十八牛に突ら茉　十九猫ま咬ら茉
二十犬ま咬ら茉　廿一矢根其外鉄の立ら茉

廿三 喉よとげ立つる茅
廿三 脫肛茅
廿四 痔の茅
廿五 癇の茅
廿六 白禿瘡茅
廿七 頭瘡諸〻瘡茅
廿八 狐臭の茅
廿九 鼠瘻の茅
三十 瘰癧の茅
卅一 魚の目
卅二 水腫の茅
卅三 小便閉の茅
卅四 大小便閉茅
卅五 小便頻數茅
卅六 大便閉の茅
卅七 淋病の茅
卅八 小兒の淋病
卅九 諸淋の茅
四十 疔の茅
卅一 癰疽の茅
四十二 諸腫物の茅
四十三 諸腫物小瘡の内茅
四十四 ねぶとの茅
卅五 肥前瘡茅
四十六 くさむらの茅
四十七 錢瘡の茅
四十八 ねこの茅
四十九 風疹の茅
五十 諸瘡の茅
五十一 灸瘡の茅
五十二 漆毒茅
五十三 霜焼の茅
五十四 脚氣の茅
五十五 疥の茅
五十六 霍亂
五十七 手足痛茅
五十八 瘭疽
五十九 聤耳
六十 月の中へ虫の入る時茅
六十一 耳聾の茅
六十二 寸白の茅
六十三 胸虫の茅
六十四 疝氣寸白茅

六十五 疝氣陰嚢腫茉
六十六 疝氣の茉 六十七 積ㇾ寸白の茉
六十八 喉痺の茉 六十九 咽喉腫痛
七十 齒くきの茉 七十一 齒痛齦爛
七十二 齒動痛茉 七十三 齒痛茉
七十四 虫齒の茉
七十五 氣をけめ齒動痛茉
七十六 小兒吉胎 七十七 口中爛
七十八 頭痛 七十九 肱暈
八十 胃の茉 八十一 乾嘔の茉
八十二 吐酸 八十三 腦の茉
八十四 兒逆

八十五 打身の茉 八十六 閃挫の茉
八十七 接骨の茉 八十八 小兒五痔茉
八十九 小兒瘡茉 九十 小兒疱瘡
九十一 痘瘡目よ 九十二 雀目の茉
九十三 突目の茉
九十四 突目うくひそこひの茉
九十五 やゝ目の茉 九十六 目諸病能茉
九十七 風眼の茉 九十八 腳氣の茉
九十九 ひうかうの茉
百 ひざこぞの茉 百一 瘢の截茉
百二 瘤の茉 百三 鼻血の茉
百四 血止茉 百五 吐血の茉

百六下血の茉　百七湯火傷
百八乳癰　百九痢病
百十腰痛帯下百十一赤白帯下
百十二難産の茉　百十三胞衣不下
百十四下痢妙茉　百十五腹痛
百十六田虫の茉　百十七くさたけ茉
百十八補茉　百十九無病延命術
百二十救卒死方　百廿救溺死方
百廿一旅立もろ者胡椒を持事
百廿二他國へ行者田螺を持事
百廿三馬の汗大毒ある事
百廿四寒の内水を服もる事
百廿五食傷ゟ食物を用ゐる事
百廿六病ゟ食物を用ゐる事
百廿七痛て後の事
百廿八癈ゟ後の事
百廿九熱病ノ後の事
百卅酒并焼酎を呑さる事
百卅一鹿を食ふ人の事
百卅二鳳仙花の事
百卅三王簪ノ事
百卅四初生の小兒歯のくへる事
百卅五初生小兒糞門陰門
百卅六小兒乳汁を呑もる事

百卅七 墮胎の事
百卅八 子をもうけぐるしき事
百卅九 食物よわやまらざる事
百四十 食合の事
急効妙藥方目錄終

萬病妙藥方

一 中風

皂莢 さいかちのさやのまゝ
粉みて鼻の孔へ吹入て吉
中風俄みて倒れ人事を知
さゝぬを治す

晩蠶砂 かいこのふんのまゝ
一夜ひたし

○又方

右好酒に
陰干にみ粉みて湯或
へ酒みて用虛證なる
ぬい蠶の蛹みを成しるを
加へて用色〳〵

○又方　拘活を酒煎じ呑へし中風口
噤人をとく

○又方　桑葉五十目湯をかけ陳干ゆして
黒胡麻百目少へ炒て黒を
右粉くすりとして黒を
或い蜜ねるに成ともを
又い丸茶にに成ともして
湯或い酒めく用

○又方　無實稍葉
右煎じ用

○又方　水萍
粉めて蜜ねて丸して
常に酒ゆく服へし
中風ゆく身ふるひ

○又方　稀薟草めおりとり
九度蒸ほし粉めし
湯ゆく呑て中風
治ゆる妙なり

○瘰癧に吉
蒼朮　ものかをきり
火み焼へし　俗云やくびのまわりに
瘰癧　出事

疫病ありまた久煮木ば
未を水ゆく呑なり

○又方 蘭の葉と陽干み
しそをこを二夜ほど常
どく煎じ用て吉或
葉を門戸に掛置も
疫病其家に入ざるなり

○又方 松葉と細みさゝ
酒ゆく一日み三度用ゐ
四五年を續て病疫
病を拂なり

○又方 文蛾 一名五月五日に

とつく千て
甘草 五分 上皮をけづり
去さゝきて
右二色合せきざみ
煎じ用ゐ

○又方 熟さめかぬりに
鼹鼠 爪足腸を去て黒焼
右粉みして水ゆて成も
湯ゆく成も望の用て吉

三 食傷

食傷 并 毒 解
羅石草 川ありひるまの

○又方　升麻十文　柾柳子一文
右粉ゟして湯ゟく用ユ

●又方　櫻ノ木皮ヲ煎シ用ユ
右粉ゟして水ゟく用

○又方　五倍子ノ末　明礬
藍ノ青葉ト一握研

四

河豚ノ油ヲ多ク呑ミ
悪物ヲ吐出シてさむる也

胡麻ノ油ヲ多ク呑ミ
悪物ヲ吐出シてさむる也

○又方　大毒解ノ葉ヲくゞらかし水にかたて
用ユ菌ニ酔そうなも吉

○又方　大毒解ノ葉ヲくゞらかし水にかたて
根ヲ用ユ或ハ紺屋ノ染
物藍ヲ用ヘシ

○又方　いたいの葉ヲ似そうなもの
葉ヲとりてよくもみ其汁ヲ
用くらうべし

○又方　青鷺　凡翼尾腸ヲ
去て黒焼粉ゟして湯ゟ
て用ユ

○又方　鉄炮ノ薬湯ゟて用

○又方　南天の葉と
もぢ米と其汁茶碗一ツ用
てもよし

○又方　蘆の根刻み煎じ用ユ
五　鰹か酢を
鰡と煎じ用ユ

六　諸魚毒解
酸の核乾粉
にして用ユ
或ハ山梔子
刻み湯にて用
或ハ陳皮の汁
乃汁　用ユ

○又方　馬鞭草
能研くもぢ汁を用ユ

○又方　椎栗草と湯ゆ
ゆり出し用て吉或ハ擂
乃實を刻ゆり出し用て
もよし

五　蔺　そのまま煎の毒ゆ
あそろめもよし　櫻乃
實陰乾か粉ゆく
湯みて用木の皮と煎じ
用てもよし

○又方　新か地と掘て汲

その水を入れ黄なる土を
入くわき濁しいさめ
上水を用て吉

又方　防風　くそこ
刈ぜんご能冷て用菌
の毒にわるひの事
よろしめ能笑又死ん

六　諸毒解　くろくのぐけし

山梔子　蔔苣
右等分に合て酒又は
湯ゆく用又藍葉黒焼
ゆて加く用て吉

○又方　菉豆を粉めく
水ゆて用
○又方　硫黄を研粉めて
湯ゆく用
○又方　蒼鷺黒焼めて
湯ゆて用てよし
○又方　葛根煎じ用て吉
七　水蛭を煎じ用てよし
泥を用てもよし
○又方　野猪の油ゆを
そこし入温醋ゆて用て吉
○又方　海鼠を食て吉

或ハ串鼠ヲ粉ミく
湯ニテ用ユ

八　酒ノ毒ヲ
葛ノ花陰乾粉ミく
用テよし

○又方　瓠苗花陰乾粉ミく
ニテ用ユ

○又方　茄子花陰乾粉ミ
ニして用くよし

九　生肉ヲ食テ毒ヲ
あつるよりハやく土ヲ三尺
掘テ其下ノ土ヲ
煎ニしてそのうハ水ヲ
呑てよし

十　蠏ノ毒ニあたりそう
ハい紫蘇又冬瓜ヲ煎
用てよし

十一　蛇咬ノ藥
蒼耳草ノ嫩葉ヲ搗
たばりて其汁ヲ呑又
粗ヲ咬そう所ニあつ
ゝ付ケ

○又方　露草ノ
花ヲ葉モ一ツみりゝて

○又方　牛のひづめ　水もの也
瓠苗の蔓　所にて用ゆ
二色酒ゆでてよきものゝべ酒
ゆく醉ひたる時度々呑
てよし

○又方　瓠苗の切口ゆく
盤口をよくすべし

○又方　のぶんめこぎり草
節ある所一寸六分切
りて盤口をよくすべし

○又方　蚯蚓の肖泊き

○又方　枇杷核　但二ツ核吉
煎じ用ゆ又盤口を洗て
付てよし　盤口みな

○又方　藜をよりぬきて
て吉又たゞこの葉を付
てよし

○又方　紫花地丁　並根
ともにたゞらかし
付て煎じ服しても吉

○又方　青鳧黒焼粉り

して付く吉

○又方 胡椒の粉醋ゐて解し付く吉

○又方 蝦蟇黒焼瓢苗の葉の汁又は胡麻の油ゆく解して付く吉

○又方 石灰と水ゐて洗ふさいく吉又は鉄炮薬を盤口に置火と付そうも吉

○又方 仙人草の汁と付くよう

○又方 煤塩と合て付て吉

○又方 田柳又さゞんせんの草研爛付くよう云云

○又方 石見川さいぬの糞のんで付くよう云云

○又方 蚓蚯咬の薬

千二 蚓蚯咬の雞の卵とぶつさいく雞の糞と水ゐく解し付く吉或は塩と噌て付或は塩湯ゐて敷洗ふ妙なり盤口さいくよう

○又方　桑の根　汁を塩と
つく付てうつ
○又方　野蓼と
汁とを付くうつ
○又方　蕨の花　陰干　粉か
して水にて解付てうつ
▲十三　蜂蠆　蜂の窠を野猪の油
に和して付く吉或い
窠を煎じ洗て吉
○又方　蒼耳草　吉又い蓼のしぼり汁付

てうつ
○又方　葱の白根　汁を塩と
灸をしてうつ
○又方　生の里芋と研て
付く吉茎ゆく螫口を
もむくもうつ
○又方　胡麻の油を能
沸て洗くうつ
▲十四　鼠咬　猫の糞を糊めくや
つぐく付てうつ
○又方　閭閻の

○又方　鼠尾草のまゝ
煎じ洗ふてよし
○又方　木綿核を焼烟
ゆくゆくべてよし
○又方　萩の葉の古く朽
そうを干粉みして付く
よし
又方　猫の黒焼を酒
みて用てよし　大豆葉を
もみ付くるも吉
○又方　壁にある鼠の穴
鼠の常に出入ところ
吟味して其土を取く
醋或ハ雞腸草の汁
みて解て付よし
○又方　黒猫の肉を味噌
汁みて煮て用く吉
○又方　鮒の肉をもみ付く
よし　鮒生そうの肉よ

十五　鼠のこそうの小便目みへ
そろぬい猫の涎とりて吉
十六　簽刺の藥
牛膝

かして付く吉
○又方　甘草　蜘子
二色粉めて
まぜ付く吉
○又方　黄牛の角粉め
して糊に合せ付
○又方　蝙蝠の腸と取
去て付く吉又黒焼め
して甘草と加て付
○又方　栗を嚼そこら
てつく吉
○又方　蠅を研爛て付

○又方　猪鼠と乾粉めて付
○又方　胡瓜の皮と付て吉
○又方　蝼蠐と乾粉めて付く吉
○又方　苦楝の樹の皮と付く吉
○又方　甘草　干蛙の頭の皮
右粉めて付く吉但塩ヲ
ノ頭の皮をもくろめか淡
○又方　莨麻子　焼て烟めくろめ
○又方　國木の皮黒焼粉
めて糊ニ押合付く吉
○又方　楡白皮　ゆきのまの皮

十七　馬に咬れて吉

艾を以て馬に咬する所の腫を灸して粉み

○又方　栗の實を焼て粉みて付く吉

○又方　人の糞或ハ馬の糞を焼て付く

○又方　雞冠の血三五滴咬る疵の内へ入くる

○又方　蘇木を煎じ用て吉

粉みて付く吉又蘇木と

十八　牛に突ころされて吉

いぬのちゝも能く乾て食の上へ

淡みて煉合突そる疵の口へ付へし強くうみ

くさい藍の葉をとりそく吉馬

疵の両つりに付く吉

牛咬そるみを吉

十九　猫に咬ころされて吉

薄荷と

汁にとかぬり付く吉

一犬の咬そうにい

韭をたゝきて汁みて石灰

をこうして陰乾にし粉に

して猪の油にて付く吉

○又方　馬銭子を能もり

て人乳みてとかく付る

○又方　蝦蟇の後の両腿

と搗爛し醋みく用ユ

先其人の頭の髪筋を

両三筋抜さるなり

○又方　蚯蚓の泥に塩を

加て付る又狂犬蛇に傷

ふくよも吉

○又方　明礬を粉して

疵の口に包をくも

一矢の根其外鉄の立

そろ薬

巴豆小粉　鼠の糞大

九にしてよく入くく吉

○又方　巴豆の肉を炒

炒て蜣蜋と搗爛し

疵に付くらう

喉にとげのそらずる薬

鏡草粉みして吹へし

○又方　人の爪一ツ煎じ用ユ

○又方　桜の實粉みして用てよし

○又方　鴉黒焼水めくり

用てよし又南天の葉を

せんじ用てよし

○又方　飴を含呑て吉

○又方　赤松の心焼て粉よ

して用ゆ吉

○又方　鳳仙花の實粉み

して蘆の管みて吹へし

但歯にあたへるべからず

○又方　紙を二寸四方づゝに

切四方の端を糊と付く

喉よく張其中へ蜘蛛蛛

を生ぐゝ入其中にて

うごくやうなれば

とけい骨ぬくべからず

○又方　釘一針を呑みい

堅炭を火て能をとして

研飯の取湯まて

用ユ又銅銭を呑ても吉

又方　生茨菰の汁を
用て吉

▲廿三　脫肛の藥
文合貝と煎じ其汁
みて洗てうつ

○又方　蚯蚓土氣ヲ能
とる味噌汁みて煮く
汁そうつ二夜用て吉

○又方　鼈甲一粉みて
醋に浸して粉
吉或い古草履を炙て
燒て其藥の上うち按

○又方　田螺　黒焼粉い
ーて胡麻の油みく
付て吉

▲廿四　痔の藥
蜆の煎じ汁みて洗て吉

○又方　桃の木を煎ーく
洗て吉

○又方　五倍子粉みーて
付く吉

○又方　下血みと吉小鷺
黒焼粉みて用ユ

○又方 藍花陰干みぢく
煎じ洗
○又方 夏枯草を拾草と煎じ
其へげみを蒸して洗て吉
○又方 川萵苣を油にて
汁と匂て吉或ハ黒焼ゟ
して胡麻乃油みて付
くらく
○又方 無花果の葉〔ママ〕
煎じ蒸て洗く吉
○又方 川
ふて煮て
龜と味噌汁
徳て服して吉

○又方 蜥蜴
黒焼ゟして粉みじく
付く吉
○又方 鯖乃頭黒焼ゟて
付く吉
○又方 馬歯莧を土氣
を能ゟ〳〵ゟい碎汁にを
ゟぼゟ取そゟとゟんじ
膏藥乃ごとくゟみ付
ぬゟと付く吉
○又方 梓木乃皮黒焼に
一酒ゟて用くら

又方　青苔海粉等分
胡麻の油にて研く吉

廿五　癇の藥
烏鴉寒中に取俗てんこうと云ます
爪と去て黒焼にく
用て吉

又方　烏鴉の黒焼と蒼
耳草胡桃と等分
入く粉にし湯にて用ユ

又方　蟾蜍
黒焼粉にして用て吉

又方　藜蘆
根の連

米泔に浸し乾粉にし
て毎月三度ばく七々日
用ユ

又方　羅石草の葉を陰
干にして湯にて用く吉

又方　人を焼
煙かまどの内を
九ば金箔を衣にし

十粒ばく湯にて用ユ

又方　白蛇生
廿六　白禿瘡藥
菌陳

黒焼粉みて胡麻の
油みく解付く吉

○又方 雞の卵に胡麻
の油を合せ付く吉

○又方 金鈴子(せんごのみ)
黒焼み粉にしく
胡麻の油みく付て吉

○又方 玉露(やくろけ)の粉 松脂(まつやに)
等分粉み胡麻の油
みて解付く吉

○又方 黄牛(めうし)の糞黒焼
みて付くよろし

○又方 鼠蓋(ねずみのふた)黒焼胡麻
の油みて付く吉

○又方 石蒜(しびとばな)花ちこくなるの
根を取切口みてすり
てよろし

十七 頭瘡諸瘡の薬

牛膝(ごしつ)こまのしぐさと云草く
黒焼み胡麻(ごま)の油
酢(す)て付くよし

○又方 小麦(むぎ)を黒焼め
胡麻の油みく付て吉

○又方 古き松乃薄皮(うすかは)を

取灰に焼輕粉と入く
胡麻の油にて付く吉
○又方　萆麻子　糊にて押
合せ足のうらに張付く吉
◆廿八　狐　眞乾の茅
古錢　右ぜんぶくろと
いさせく碎らそと付く吉
○又方　墨を研　腋の下
ぬりし所あり　外かからぬ
こ其所ゟ灸とそへて
○又方　明礬大　輕粉少

粉ありて毎朝とりぬり
てよし
○又方　五味子を粉
水ゟ解　付く吉
○又方　石灰七日酒ゟ
ゟし付く吉
○又方　生の紫蘇の子と
研　腋の下ゟ
ぬりてよし
○又方　巴豆　田螺
二色研　蘭し　腋毛と
能抜とりぬり又田螺

の売粉ゟく付て吉

○又方　銅青と醋ゟく

さくらもの

▲廿九　鼠瘻茶

山百合の根と研蜈

蚣の黒焼半分合せ猶

ゟく付くらう

○又方　猫の糞乃雨露に

さらそ一胡麻の油ゟくとる

付くらう

三十　瘰癧の藥

敞龜と味噌汁ゟく

煎じ服して吉

○又方　野菊の根擂

爛し温めく呑ゟく

野菊乃根粉み

胡麻の油みて付ゟ

○又方　夏枯草と煎

じて服へし

▲三十一　魚目　千日瘡

白米一粒と魚の目

乃上に押當小刀ゟ

先ゟく米の上に十乃

字を書て茄子を二ツ
より米と茄子の中
へ入〳〵二ツと能合せく
糸ゆて茄子とそろ
溝の中へよし米
くらそろ時そ魚の目ぬ
ならぬ

○又方 塩漬の茄子を
切片 魚の目とそろて吉
○又方 蜂の子むへくぬ
時そろて研 爛〳〵付
てそろ

○又方 秋ぐさの葉莖
ともに刻 煎じ洗て吉
▲三十二 水腫の茶
冬瓜 黒焼 狸の皮 黒焼
二色等分に合せ粉み
して小豆の大さみ丸
一日み三十粒 酒
ゆく用ユ
○又方 葶藶子 いねのづか
蒼耳子 二色等分
みじく湯みて用く吉
▲三十三 小便閉茅

菅と煎じ腰湯とす
○又方 葱の白を細に
切炒熱しく烏ゐ
ほくこ小腹を温てう
○又方 田螺の肉をとり
臍に張て小便通
じくく吉
○又方 瓜蒂 杏仁 各
粉みして三文温酒
用ユ酒と飲さらのみ
飯の湯ゆく用ユ

○又方 沈香 甘草 二文
煎じ用てう
○又方 車前子 を炒ごこの
煎いくく用てう
○又方 枇杷葉を煎じ
用てうう
○又方 塩を臍の中に
埋と其上に艾をく
灸しくく吉
○又方 文蛤貝うくほ
そうを粉みして陰莖
の口にくく吉 女もあい紙み

○又方 鰻鱺魚 俗にさいまん と取 乾て置煎じ
用ユ

▲三十四 大小便閉の茎
明礬の粉糊ゆるく
丸じ臍の中にて
紙をもて蓋をしく
置て吉

○又方 皂莢を焼て粉
末 服しく

○又方 滑石の粉を糊
ゆるく臍の下一すみ
張て吉

○又方 陳皮一両棗の
白こを去て其汁酒
ゆるく煮焙乾し粉
して三匁ずつ温酒に
て用ふく吉

▲三十五 小便頻數
鮧を黒焼みしく
粉み一湯ゆて用ふく吉
草薢

粉ゆ〻く塩湯みく
用て吉

三十六 大便閉の茉

青苔葉 黒焼 三匁
葛粉 一匁 粉み〻酒
ゆく用ユ

○又方 大蒜 一ツ 熱灰み
埋 熟〻煮 時取
出〻皮を去て綿み
包 糞門と塞ハ通
ど忽なり

○又方 牽牛子 大黄

桃仁 右粉みく
赤飴 鏥とのべ丸を
長く丸〻肛門ろ
さ〻く

○又方 白桃花陰干に
〻白砂糖 水あて
猶も丸じ用ユ

三十七 淋病ノ茉
葛粉 蜷 俗かの
川〻 ことゝ云
等分合せ粉み〻一匁
煮葛水みく用
○又方 牛膝茉根とも

きびら酒ゆるく用て吉
○又方　大麥三合　甘草二分
煎じ用てよし
○又方　燕脂　足を去て
黒焼粉ゆるく用ユ
○又方　車前子の葉根
實ともに生ゆるを
て酒ゆるく用ユ
○又方　胡桃實皮を
去て煎じ用ふ吉
○又方　白雞冠子又ハ
葉を煎じ用て吉

味噌汁ゆるく煎じ
服して吉
○又方　早稲秩　陰干
煎じ用て吉
○又方　古壁のすゝを取
て水ゆるく洗煎じ
用ユ小便ちぬる腫
氣あるに吉
○又方　夏枯草　花莖ともに煎じ用ユ
○又方　蜂の窠　八分
干姜二分煎じ用ユ

○又方　椄粉ミ搗ク　山梔子　黒焼　麥門冬　黄栢三色ヲ
煎ジ甘ク吉血ク其汁ヲ服ス

三十八　小兒淋病

浮石粉ヲ用ヒ吉

○又方　諸淋ノ菜
多賀良草ノ根ヲ洗煎ジ〳〵用ユ

三十九

○又方　鮒ノ腸ヲトリ
黒焼粉ヲ酒ヲ以テ用ユ

○又方　亂髪黒焼粉ヲ
毎日二三度ヅヽ酒ヲ以テ用ユ　男子ハ女子ノ亂髪女子ハ男子ノ亂髪

○又方　荷ノ葉黒焼粉ヲ酒ヲ以テ用ユ又白王
搥乃花陰干ヲ煎ジ

○又方　象牙ノ粉ヲ茶
半服煎ジ湯ヲ用ク

○又方　鹿茸　ヲ炙ノ

五分計一味噌汁ニ
煎ジ用ユ

○又方 滑石 巴豆粉ニ
ヲ合セ臍ニ張テ
ヨシ

●又方 古キ木杭ヲ黒焼
粉ニ〻空心ノ冷水ニテ
服ス 男ハ女ノ杭
女ハ男ノ杭

▲四十汁ノ菜
栝蔞 木通
桃仁 ソノ内ノ
右等分粉ニ〻乳ニテ

○又方 蒼耳草 根葉莖
ヲ灰ニ焼醋ニテ解
付ク吉

○又方 熊膽水ニテ解
烏ノ羽ニテ
付ベシ

○又方 木瓜木黒焼ニ
一胡麻ノ油ニテ
ヲ又日ニ
ナス

○又方 蜂ノ脱 僵蠶

○又方　黒焼紅花　右等分粉ゝ付く吉

四十一　癰疽の茉

青苔葉　粉ゝ飯のとろゝ湯ゆくとく付く青苔葉を蓋に

○又方　大蘭根と能　膏茉の上みぬるく吉

○又方　鮒魚　古綿能　あぶり等分粉ゝ水ゆて

とろゝ付くく吉

○又方　大黄を熱湯ゆて　物ゟ出して　相をとる

○又方　枯礬　秤　葱草　乳香　粉ゆ

一酒ゆにて用へ〳〵或ハ
稀一蕎麥と煎し枯礬
乳香を〳〵膏茉の
如くゆにて付く吉

○又方　絲瓜の黒焼を
白湯ゆにて一貝ホ三度
用ユ

○又方　甘草　金銀花
生のまゝ〳〵花のまゝ生もよし
二色等分搗爛し酒
ゆにて加へ〳〵稠の来ほ
時瘡の廻に付口ほ

諸膿物の葉根ゆもにて
芝切の
陰乾ゆにて粉ゆして水ゆ
めけく毒氣を洩とべし

○又方　百合生ゆく研
爛し塩少ゆ食少
〳〵入いれ〳〵し處に自ほ

○又方　皂莢子を陰乾
ゆ焼て粉ゆ酒
ゆく用て吉

○又方　葉紫花の油を

○又方　河原ひさげの
實陽乾煎じ用て
うがひ

○又方　大山椒の實を
紅時をたらして
分々又葉を陰乾
し粉ゆきて醋ゆく
引てうがひ

○又方　鮒魚　蕎麥
等分その上たらめし
腫物ゐ張付ゐく吉

○又方　赤螺を焼て
明礬二匁　黄柏一匁
右三色粉ゆ醋或ハ
酒ゆく細々引て吉

四十三　諸腫物小瘡之内茉

國皮　國木のまゝ上皮けづりて内皮を用ユ
忍冬　葉莖ともに
右さゝきて等分に合せ一服

様ハ腫物の頭ノ所を
殘して外ハ茉乃上
に杉原紙を引ゝ
蓋ゐとゝのなり

二夜ほど常のごとく煎じ用てよし吉

▲四十四　杉ぬの茶

杉の脂　胡粉　等分

研合せ紙にのばし蓋をなすべし

○又方　將門油　烏の羽をさいくゝして吉

▲四十五　肥前瘡の茶

米泔の淳一とをり

付くよし吉

又方　赤小豆　四十九粒

芎根　右搗爛して

付くよし

○又方　皂角の葉水にて洗てよし

○又方　藜蘆の葉根ともに煎じ洗て吉

▲四十六　くさめの茶

田螺　黒焼　粉ぬる

胡麻の油ぬてこれを付くよし吉

○又方　竹の虫糞を粉にして付くよし吉

○又方　亂髪　焼粉ぬる

胡麻の油ゆてとれ付く吉

○又方 列當 黒焼 粉ゆ
一胡麻の油ゆてとれ
付くよし

○又方 浮萍 一ツ
能をゆて付く吉

○又方 山梔子 黒焼 粉ゆ
女子の髪毛ゆ
土器ゆ入黒焼ゆく
一胡麻の油ゆく
付く吉

○又方 鮒一ツ 腸をとり
粉ゆ一胡麻の油ゆく
付て吉

○又方 古傘一紙を焼て
胡麻ハ油ゆくとき
付く吉

▲四十七 錢蕩 田虫ともに
巴豆 皮と
焼て 糊に
をしまぜ付くよし吉

○又方 硫黄 二文 明礬 四文
山椒 四文 右三色と粉
川大黄 三のねろ
搗汁ゆて煉合せく

付て吉

○又方　古皮鞋底と焼て
軽粉少し　胡麻油
和て付くる或い　猪の油よ
和て付くるを吉

○又方　石灰　焼あくく
大黄　くろくいとて右粉み
一胡麻油或い猪の油
和て付ら

○又方　馬鞭草　くゆつらの
石月みて　搗汁を
呑くく吉

雁の屎を焼胡麻ノ
油和て付くく吉

○又方　蛤貝　焼て　一名　軽粉二分
粉みして胡麻の油よ
て付くく吉

○又方　藍花大軽粉少
を卵合せ塩湯和て磨
あくい付くくら

○又方　蕎麦粉湯和て
らに付くく

○又方　真竹の葉黒焼
一名

○ 軽粉一分胡麻の油
みてとき付く吉

○又方 仙人草青汁
松脂をねと合せく
付く吉

○又方 土茯苓
黒焼胡麻の油みて
ときく付てよし

○又方 ほその葉大みく
あらめやきて置い水流
盞ほし
出て食 大妙薬なり

四十九 風瘡の茉
榎の葉を噛みて煎
じ洗て吉

○又方 五加樹花を煎し
洗てよし

五十 諸瘡の茉
赤小豆 香色よいやて四十目
同黒焼みーて四十目
粉ゆしひよごやう
ごのりと汁みてとき
付くし

五十一 灸瘡の茉 やいよのよ

枯礬 こやうばんの末 水よ
ときくく付て吉

○又方 活葉根を干くく
付て吉 汗
もらし

○又方 馬兜鈴の葉の能干た
をひねり
○又方 杖の葉を粉ゆ
てひねり或ハ根
ゆくもらし

▲五十二 漆毒 水一ぱい
鰹を食しくく吉生なまき

時ハ鰹干とせんじ
服して吉

○又方 紫蘇 陳皮
香附子 各等分み
合せ一ぱい湯
ゆんじ用て吉

○又方 刀豆を磨くく砥石の
泥とりて付くく吉

▲五十三 霜降 柏の葉
牡蠣 自焼ゆ粉み
して朝ごとに麻の油よて
ときく付くく吉

○又方　里芋土を洗ひそ
其まゝ黒焼粉ゐゝ
胡麻の油ゐてとき
付てらう

○又方　黄丹を猪の油
ゐて付くく吉

○又方　茄子木の根と煎
じ洗てらう

五十四　脬肌の茉
胡麻の油　黄蠟
能ゞんじ熔ゝ肉桂
五倍子二色炒て油の

内へ入膏茉ゐゝ先熟
湯ゐて患ぶをよく洗
押付置なり

○又方　生薑の汁　紅の糟
塩少　永の油　右搗爛
ゝ炒熱ゝ患ぶをよく洗
ゐ按入置い皮やはらか
口合ありて

五十五　痰の茉
千薑　胡桃　粉ゐゝ
酒ゐて用てらう

○又方　氷砂糖　十匁
干姜二匁　陳皮五匁
右三味粉みして自湯
みて用くる吉

○又方　梨子ニハ胡椒二三十粒
梨子よ穴を明て穴ごとに
胡椒を入紙か包熱灰
よ埋あぶりめ用てう

○又方　胡桃　石　煉一匁ツゝ毎日
蜜みて煉一用ユ
白湯ゆく

○又方　半夏　陳皮　白茯苓
桔梗　右等分粉みて
用ユ

▲五十六　霍乱　胡椒二三
粒毎朝用其日ハ霍乱
せぬらのるなり

○又方　益智　木香　藿香
三味等分に合せ熟湯
みて飲り出ー用ユ粉
ゆー湯よ何ても用て吉
夏の中ハ

○又方　葛粉　黄柏　交
胡椒　四匁　右粉みて

用ユ霍乱又ハ虫食傷
下腹何ヲ吉

五十七　手足痛茶

榎　桑　悉々　三色煎
じ飲めめしめて吉

五十八　瘡瘍

屎虫の皮　俗ゆひそと云ものく
○又方　藜蘆　菊の花
右二色黒焼めして胡
麻の油めて付く吉
○又方　蚯蚓　を研爛し
猪の油よて付く吉

○又方　蠐螬の皮を巻
て吉青葛蓋みて包吉
○又方　山べといる魚の皮を
巻て吉又黒焼粉よ
して胡麻の油めく
ときて付く吉
○又方　泥鰌を黒砂糖
よてせんじめて付て吉
○又方　小麥蒿葉　黒焼二ム
輕粉　五分　粉めて
杉の緑　黒焼輕粉

少ー加て粉ゐて胡麻
の油ゐてときを付て吉
○又方 梅干 茄子 黒焼胡麻
の油ゐてを付くう
○又方 大黄根葉ともて
黒焼胡麻の油ゐてときを
付くう
○又方 鰡の頭黒焼胡麻
の油ゐてときを付て吉
○又方 米の粃黒焼 藜の
汁ゐてときを付てう

○又方 荒和布を黒焼
ゐして胡麻の油ゐて
付く

五十九 聤耳

大根をおろしなほ付く入て吉
うちのさゐ

○又方 熊の膽を水はと
て少ー入く吉

○又方 枯礬 陳皮二分 紅 少ー入焼
て耳の内へ吹入る也

○又方 天南星 俗をくへぬ

根と搗ちと汁とを
少しづゝ入くゝ吉
○又方 蝉の脱 黒焼胡
麻の油にてときつけ耳の
内へ入くゝ吉又粉みして
紙撚の先に分くゝを吉
○又方 蜂の窠蝉の
退荷の葉三色等分
黒焼胡麻の油みくく吉
○又方 地ちぐもの巣を
ちぢかしてくゝ其汁をくゝ

○又方 蛞蝓干みして
水にとかし入くゝ
○又方 尾長蛆黒焼粉み
して胡麻の油にてとき
付くゝ
○又方 茄子漬成程古き
を能洗ひ乾して其汁を
ちぼりて耳の
内へ入くゝ
○又方 莞の蓑衣の黒焼
其煙を耳の内へ
入くゝ

○又方　石龜の尾陽乾
末粉ふりて耳の中
へ吹くべし吉

○又方　生猪油　虹蜕
鍋墨等分　生姜の
汁にてねりて棗の核程
丸じ鼻に包耳の
内へ入るべし

▲六十　耳の内へ虫の入る時
胡麻の油と其虫の入
べき方へ一盃入るべし吉

○又方　雞の肉一切あぶら

なかを耳の穴のあるに
置び出なば雞冠乃
血を入るもよし

▲六十一　耳龍聾の茉
蚯蚓　黒焼粉ふりて
胡麻の油よそれに耳
の中へ入るべし吉

○又方　九節菖蒲あり石菖蒲
の根を粉ふりて
乃油ねりて煉合せ綿ほ
どに耳の中に入べし

六十二　寸白の茎
蜜椒をそのまゝ痛処よ
付く吉
○又方　阿膠を梅酸をと
ときゝ痛処よく付てう
○又方　真竹の筒の皮
黒焼粉ゆして毎一匁
ほく醋と温めく湯よ
て用ユ又ハ莠の煎じ
汁ゆて用ユ
○又方　毛蒭　莖　薏苡仁葉
莖ともに二色等分合せ
煎じ用て吉
○又方　木綿の核煎じ
用くよう
○又方　烏黒焼　芥子　盲
粉ゆして醋ゆてこね
痛よ吉

六十三　腦虫の茎
牛蒡の葉をもとう
うて塩少し入湯ゆて
用ユ
○又方　藜蘆　蘆粉ゆしく
粉ゆして丸じ丹を衣ゆ

みして毎日一粒白湯
もて用ユ

○又方 薏苡仁粉みして
毎日少しづゝ醋にて用ユ

○又方 硫黄粉みして
丸一味噌を衣にかけ
毎日白湯にて用ユ

○又方 上野の砥石茶
等分合せ毎日一ふくづゝ
塩湯もて用ユ

○又方 松の緑三四月に
取陰干みして剉古酒

盃ほど二盃入一盃の煎
じ用ユ又生松葉も吉

○又方 童子の大便を干
粉みしくだし一生姜の
汁もて用て吉

▲六十四 疝気を治す白茅
山茶花葉二十枚 硫黄三匁
煎じ用ユ

▲六十五 疝気陰嚢腫茉
南天の葉うるくせん
じくく温めくく細々たゞ
よ

○又方　馬鞭草　葛根　草烏　烏
　鴉爛しぬりて
▲六十六　疝氣の莖
　益母草　忍冬　等分水
　よて煎じ一用之又
　ら一味丸〳〵金箔
　と衣のおして用〳〵言
○又方　藜蘆　石灰
　山椒の肖　石粉みして
　糊よてねつ〳〵痛処よ
　張付〳〵言
▲六十七　積寸白茶
　蒼鷺頭羽足を去く
　黒焼粉みして〳〵湯又ハ
　酒よて用ユ
▲六十八　治喉痺
　刀豆黒焼粉みして
　管よて吹〳〵妙あり
○又方　赤蜻蛉を干粉
　みして〳〵吹入〳〵言
○又方　燈心草を灰に
　焼て塩等分よ合せ
　管よて吹入〳〵言
○又方　蜜柑の黒焼吹

〇〻吉喉腫
牛蒡ゟ
てを急に喉へ
血をさゝ

〇又方 生白礬 塩と等
分合せ喉へ吹〻吉

六十九 咽喉腫痛
山繭の黒焼絹よ
含て

〇又方 山梔子一味煎〻
用て

〇又方 訶子
のまゝ

〇又方 耳の垢を取〻
吹〻吉

〇又方 薏苡仁の粉
吹〻又食かけて吉

七十 歯〻
尾長蛆黒焼み柏礬
〻加へ〻粉よ

含て其汁を呑て

〇又方 菜
吹〻吉

〇又今 昆布の根黒焼
藜蘆黒焼 柏礬
茄子蒂黒焼

粉みて付く吉

○又方　桔梗　茴香等分
焼粉みて付てぬりて吉

七十一　歯痛齦爛茎
蓮の葉黒焼　國木の
皮黒焼等分合せ粉
みて付く吉

○又方　古茄子漬黒焼
明礬等分粉みて
擦る

○又方　苣のようを黒焼み
て付く吉

七十二　歯動痛吉
楔を煎じ毎日含て吉

七十三　歯痛茎
藁　昆布　二色黒焼
等分よ合せ粉みて
付て吉

○又方　松葉手一束柚の
木皮　上皮細み刻
三服　茶
水一盃半入
一盃よ煎じ
含てうがい

○又方　荔枝黒焼粉みて
祖をさす

○又方 車前草酒みて
煎じ含てうつ〳〵
○又方 蜂の窠と黒焼
み粉み痛歯よ
擦ヒ塩水みて口そゝぐ
吐そうつ〳〵

七十四 虫歯の茉

焼酎みて口そゝぐ又
含てうつ〳〵
○又方 杉脂又ハ檜乃脂
丸して虫歯の穴よ入〳〵吉

○又方 蠑螈を焼粉み
綿か包大豆の大さに
して痛処にあて〳〵吉
○又方 丁子を虫歯の穴よ
入〳〵吉
○又方 胡椒一粒 熱湯よ
浸〳〵上皮を絹に
包含〳〵吉
○又方 石亀の尾を取一
寸ぐらい切干皮とも
痛よくへて吉
○又方 馬の歯と粉み

絹よ包含て吉

○又方　松の心或ハ節を
黒焼粉ゆ一松の楊枝
よて歯のわいくさにく

○又方　犬山椒の根と
煎じ　咬木　含くよう

○又方　取痛処よくして吉又
葱の白根を胡麻の
油よて煮の
含くよく吉

○又方　髪剃紙粉ゆ
胡麻の油よてとき右
痛よい左左痛よい右の
耳の内よくよく吉

○又方　芥一の葉を採
汁と取少一耳に
くよう

○又方　蜣蜋を焼虫歯の
穴よくよく吉

○又方　苦桃の枝の皮を
こそげく粉ゆして大豆
程の丸一絹に包胡麻

の油を温め其の中へ〳〵
虫歯よく當て嚼合て吉

七十五　乳と
南天の葉と含〳〵吉
歯痛よい

七十六　各胎
天南星　粉ゆく鞠よ
て押合せ足の裏より拙
なくなるまで〳〵

○又方　尾長蛆と陰干
粉ゆく鞠ゆく足の
裏よく〳〵つくく吉

○又方　髪の毛ゆて指の
頭をゆく〳〵ひ薄荷の揉
汁をゆく〳〵て古を拭ひ
きるまでく〳〵

○又方　青ゆく〳〵の絹み
水とひく〳〵舌を能拭ひ
後に時々生姜の汁と
をとぬゆく〳〵

七十七　口中爛よ吉
黄栢　甘艸等分粉
みく〳〵蜜よて解合て吉

○又方　地骨皮くこの根の皮し
柴胡等分煎く〳〵服して吉

七十八　頭痛

海白菜を煎じ髪を洗てうつ

○又方　菊の花を煎じ頭を洗てうつ

七十九　眩暈

山梔子黒焼みぢく吉酒よて用くうつ

○又方　蒼耳子と粉みぢく蜜よて用くうつ

八十　翻胃の茅

南京涂付皿粉みぢく薄茶一服ぞうや塩湯よて用くうつ

○又方　古さ蜆の殻を焼て白灰とみぢく飯のとゆ湯よて用うつ

八十一　乾嘔の茅

櫻の木皮黒焼粉に白湯よて用くうつ

○又方　陳皮　浜梔子　等分粉よしてび用ユ煎じ用て吉

八十二　吐酸

赤螺の白焼粉みし
用ふく吉

八十三 五臓の虫
野蒜の茅
中に取陰干みし

○又方 塩鯉まいさけ頭洗粉みしく酒よて用ユ
て水まくく煎じ少しく
用ふく妙

○又方 やがてといふ魚と煮
て食しくく妙し

○又方 まなめいを食しく吉

八十四 咒逆の茅 茅のまゝ
柿の蔕を粉みし煎じ
用てふ

八十五 打身の茅
芋麻の葉莖ともに能
干黒焼みし酒よて酔ほど用ふく吉

○又方 唐の芋を食しく吉

○又方 合歓ねぶの木
黒焼粉みし酒よて用

八十六 閉茅
温飩の粉焼酎よとく

付く吉

○又方 膠を砕き付てう
○又方 桐漆 紺屋の糊
梅干一三色押合付く
う

○又方 蓖麻子黒焼五分
よく毎日用く吉

○又方 石見川の黒焼
酒にて用くうき

○又方 生姜 牟粉水
にてねりと付く吉

○又方 牟粉 山梔子
等分粉みして生姜の
汁にてとく付く

○又方 鮒又は鯔の頭研 爛
付くうき

○又方 梅干黒焼粉み
し毎日湯にて一二度
よく用くうき

○又方 櫻の木皮煎し
用く吉

八十七

接骨の茱萸
山藺黒焼粉みし
山芋生にて研合せ

○柳乃皮よく干て粉にし骨節切
て巻てう
○又方　肉桂の粉を膠よ
てとき痛処へあてく
ぬゐと其上を檄柳よく
箕をあこ包置く
○又方　檜木の皮蘞皮を
さゐ酒よく浸炙又酒よ
浸細々しく後土器
よく入黒焼粉みしく
酒よて用くう
○又方　土龍猫青鴉
右三色黒焼みし頭蟹

日よ干粉みし骨節切
そゝろころに糊みてねや
しく付く檄柳の皮を
葉よくあこて下み青苔
て巻のりこて敷箕よ
○八十八小兒九疳の薬
黄柏　漆渣等分
粉みして九し用
○又方　車前草根葉
實ともよく黒焼うゝき
とおび焼めし味噌乃

肉ヨ右の黒焼ヲ少ク
入焼用ユ

○又方　痔ヨテ目見ヘサラ
ミハ蝦蟇黒焼ミー
粉ニシ〳〵少〳〵白湯

○又方　赤犬の膸を二十一ヨ
切片古酒ヨ浸置味
噌汁ヨテ能煮テ一
切ヲ一日ミ三度ニ〳〵三廻

八十九　小兒瘡の茉
用ユ

九十　小兒疱瘡粉ミテ用ユ
赤牛の齒粉　目に
入ヨハぬるその脂を乳ヨテ
ときヨ目の中ヨ少〳〵さ
て吉崔のとこげを取ク
殻とさゝと肉ヨあろ虫計ヲ

○又方　蒼耳子を粉ミー
酒ヨて丸ジ白湯ヨて
用ユ

○又方　牛膝　粉ミ
シて丸ジ白湯ヨて用ユ

九十一　瘡瘍　粉ミテ用ユ

もまたよろし

○又方　活そろの鰻の血をとり吉
て眼にさしてよし

九十二　雀目の茉
鯽のきもを用ゐて吉
又八ツ目鰻と食してよし
吉又赤ゐいのあぶらもよし
煮て食してよし

九十三　突目の茉
さゞいの蓋雨ざまをかわかし
白焼みて明礬のやき
かへて少し加て粉にして

○又方　管まてあぶりて吉

九十四　にら月うゐそひ
月よもぎ立さるに吉
莎草黒焼上野硯等分

右ともに合せすへ

九十五　やこ月の茉
黄連を煎じ洗て去
水水よてさいく洗て吉

又方　黄柏一支明礬二分
石菖の根九分　檜の葉三枚
倹先を切古銭一文湯よて
ねり出しさいく洗てよし

九十六　目の諸病よ能茉
大きその葉を前煎一辰砂
を少加へさいく洗てよ一

九十七　風眼の茉さ一茉ともす
防風　黄連　龍膽のまも
薄荷　等分煎一洗て
う一煎じのてもよ一

○又方　黄芩一ゑ黄連三ゑ
大黄三ゑ右粉み一捌
よて丸一用ひ吉

九十八　睛一つけ一れの茉
牛の糞あさその内に
て痛処よぬり上を包置き

○又方　水紅花のまも
其汁よてさいく洗て吉

九十九　こむかへ一
木瓜の木よてさまを卫て止

○又方　蒜一つを
塩撮入て痛処よぬ卫て吉

百　いさそくその茉
防己と粉よして湯よて用
吉

百一　瘡の截茉
酒一盃一夜星の影をう
け一明日夜明よ陳皀甲一ゑ

右の酒よくてのむ甲いなほぐそしくうと用
○又方　蒜を搗爛黄丹を入く雑頭の實ほぢに
丸一發曉よ東よ向て
一丸を新よ水を汲て服
一て吉此茉五月五日合て玉

百二　瘧の茉
益母草　陽乾二分水
酒等分よて常のごく
せんじ用く妙し

○又方　河原柴朝三分ほ常の

○又方　何首烏せんふ刻を
二分ほ常のごくせんじ用て
○又方　山椒五分艾葉一分食
水よ常のごくせんじ用て
○又方　久瘧よ
食ごくよう
○又方　茗百子酒よて搗て
丸じ用く吉

百三　鼻血の茉
山梔子黒焼粉みて
鼻の中へふく入く吉

又方 奉書紙を水にて
ぬらして百會に當て上を
火のこをもつて吉

又方 髪 髪の毛を焼き灰にして吉
臭の中へふりかけ吹入れても吉

又方 千葉の柏葉をかげ干にして粉にし臭乃
中へふりかけ吹入れても吉

又方 蒲黄 かまの花を白湯にて用ゆ

青鳩黒焼粉

又方 子規黒焼粉 鯨の髭粉 松葉粉 各等分に合て吉

又方 狐のやろう裏紙を吉

又方 杉原紙香色のあぶり
灰 大黄をあらく
付てよし

又方 奉書紙寒三十日水の
入ごとくし乾て置ひさ
付てよし

又方 石灰

○又方　薰茅　疳疔身瘡刺血止何首烏　胡麻糟　右綿等分胡麻油和塗其瘡口令遍薰炙吉

百五　吐血の茅　血を吐く

串柹黒焼　粉末して湯にて用ゆ吉

○又方　無花菓生にて食ふ吉下血衄血を治す

○又方　烏鴉黒焼粉末して湯にて用ゆ吉

○又方　茅花　能く血を止む

紫苑の葉等分に合せ新汲水一碗七分に煎じ服す吉

○又方　藕節　その根と共に細末して一銭を呑む吉

百六　下血の茅　指鯖の頭黒焼湯にて用ゆ吉

○又方 黒猫の黒焼湯にて
用くよし
○又方 白木槿の葉もみ
ゐ粉かけ湯にて用く吉
○又方 梭相のもと黒焼
一湯にて用く吉
○又方 楊梅千黒焼粉ゐ
湯にて用く吉又もつて
かぶれたるに妙し
○又方 松の緑四月八日に取て
酒に一夜漬一千黒焼に
して酒にて用く吉

○又方 小兒の下血ゐい赤芍薬
黄柏等分粉ゐして湯に
て用く吉
▲百七 湯火傷のやけどの
馬の油をぬりて吉
○又方 卵を付て吉
○又方 生地黄搗爛一醋
まて能ねりてあてく付て吉
○又方 白木槿の花もみ
黒焼土器を粉ゐ一水まてとく付て
○又方 砂糖水まてとく付て

大きやけどの砂糖湯よくたでわびくうへ

○又方　ひるをすなる山蛭子三ツ粉み一蜜まぜてとろ〳〵煎じ痛む所へ塗る

○又方　萩の黒焼粉みかめのこぼも汁ねりて付くべし

○又方　螺蛸の殻の古くさきて白ろうと火あてあら粉みろうひねつ

百八　乳癌

山べとゝの魚をもとめて付て吉

黒焼みそ汁よく付くなり

○又方　いのこ草うげ〳〵黒焼胡麻の油もてとく付く吉

○又方　蠶蛾の糞黒焼粉みて水もてとき付く吉

○又方　山の芋をすりおろし酒もんでのむ

○又方　蒲公英よくもみ汁を呑

祖を腫処へ付くべし

○又方 牛膝を水にて煎じ膏茶のごとくなし付て吉

▲百九 痢病 わらびの寒の内の蒻能干香色よく炒粉にし湯にて用く吉 泄瀉 其の蒻粉湯にて用く吉

○又方 艾葉 陳皮煎じ其汁と服しくよし

○又方 かぬりとうの茅 山櫻の皮 黒焼 茶 等分 粉にし湯にて用くべし

○又方 生姜の舊根 極上の茶 右等分に合せ常のごとく煎じ用く妙なり

○又方 白鶏頭花實ともに煎じ用く吉 痢病 泄瀉ともに用ゆ

○又方 病泄瀉 滑石六匁 甘草二匁 右粉にし湯にて用て妙なり

○又方 鹿角菜 海草 味噌汁にて煮用てよし

○又方 千鳥黒焼粉にし白湯にて用く吉

○又方 藜蘆三文 一文ハ生一文ハ香色ニ炒粉
ニシテ。ソバカスニ一二粒ヅヽ九ニ一二粒
白癬ニハ炙ニシテ甘草ノ煎
ニ汁ニテ用ユ赤癬ニハ
桃ノ木ノ煎ニ汁ニテ用ユ
泄瀉ニハ茶ニテ用ユ吉

○又方 赤螺見ゴト 葛粉等分
右合セ味噌汁ニテ用ユ吉

百十 腰痛帯下ニハ
芹ヲ常ニ食シテ吉

百十一 赤白帯下ニハ
ウツギノ花陰干粉ニ
シテ煎ジテモ用ユ

○又方 罌粟花陰干粉ニ
シテ煎ジテ用ユ吉

○又方 香附子二文 白芍薬
乾姜五分 右三色 香色ニ炒
粉ニシテ飯ノ湯ニテ用テ吉

○又方 労シテ痩不食ニハ
半角 黒焼
一文

○又方 三葉ノウツギヲ黒焼ニシ
ウツギノ煎ニ汁ニテ用テ吉

○又方 罌粟ノ花陰干粉ニ
シテ煎ジテモ用ユ

○又方 香附子二文 白芍薬
乾姜五分 右三色 香色ニ炒粉
粉ニシテ飯ノ湯ニテ用テ吉

○又方 労シテ痩不食ニハ
半角 黒焼
一文
淋病ニモ吉

雞ノ卵一ツヲ和シテ用ユ
一日ニ三度一七日ニ二七日用テ吉

○又方 雞冠花ヲ黒焼ニシテ用ユ

白血よハ白こと用長血よハ
赤こと用くよろし
○又方 燈心と大豆ほど丸
ゞ醋和て用く妙く
▲百十二 難産の茉
伏龍肝 右こさかまごの内の
右粉め〳〵酒和て用く吉
○又方 臙月の兎の頭黒焼
粉め〳〵葱乃白根と煎用ユ
○又方 當歸 川芎 益母草
右等分剉一服二多ほど
に合せ常乃ごとく煎じ用ユ

北茉こゝけそうハ用さ
産をおろくをも
○又方 胎死横産逆産胞衣
六月土用のお 下らせ御
取く陰干め〳〵
らそそなて用て妙こ
▲百十三 胞衣不可のらぬこの
鼠尾草七月ゟ 事
右等分粉め〳〵 荷葉黒焼
用てよ
○又方 茄子蒂黒焼 糊よ
合せ右乃足の ひゞなへ

ゆとそぐてよ

○又方 蕓麻子を糊よ合せ
足の裏ま張く

○又方 黒大豆 五合 酒二升
入く煮熟ー豆を去く
其酒を呑てよろし

百十四下痢妙薬

阿煎茶 湛濃湯 黄柏
各等分 臓粉 少許
右粉ゆて鉄漿紙の上よ
○又方 阿煎茶 黒焼竹の
虫屎 黒焼右等分粉ゆて

千菜と煎ー洗此茶と
ひねとかけ

○又方 蕎麦がく
煎ー温めく洗てう

○又方 菉豆の粉一分蚯蚓
の屎二分水ま研て
○又方 茶 軽粉
せひねとかけ

○又方 藜蘆を陰干ゆ硫
黄と少入胡麻の油
○又方 鹿角 白焼 黄柏
右等分粉ゆ胡麻の油

もそとさ付くよう

○又方　枯礬石一両　黄丹八匁　紫色ほし
熬て粉み一溝の中へ悪
水まて瘡をあらひてひね
ほし白湯まて用ゐ吉
かけり

百十五　腰痛　そくつう
小麥藁黒焼　薄茶二服

○又方　かしき木の實用て吉
百十六　田虫の茶
硫黄　大黄　明礬

右等分谷粉み醋まて
とろと付此茶と付二三日湯
水をつふべしとら水みて
とろと付火まてあぶりて妙
○又方　鉄のさびとら水みて
とろと付火まてあぶりて妙
百十七　くさたむしの茶
醤油とぬると上を火あぶ
多又ぬるあるまて三四度
かゝく愈心

百十八　補茶
かち栗粉み乳汁ま浸
一千又浸し二三

度其後湯ヨリて一月ヨリ二三
度ヅヽ用ユ諸虚ヲ補テ吉

○又方　羅麻ノ子ヲ
石一味葉ヲ取陰干ミ粉
ミて朝夕用ユ大虚ノ人ヨ吉

○又方　脾胃虚ヨて腹下ニ
寒ノ中ノ自然生ノ山ノ芋
ヲ取竹ノ刀ヲ以て皮ヲむき
陰干ミ石臼ヲ以て粉ミて
用ユ銅鉄ヲ忌

○又方　黒胡麻ヲ炒ミ
ヨ入操上皮ヲむき去ク

白味一升ヨ焼塩少ク入
粉ミ朝夕服ヲ大ヨ益アリ

○又方　臓腑ヲ補ヒ
追去腰膝筋骨ヲ除ク
シて身ヲ軽ク年ヲ延ク事
ようござる茅ノ根ノひざ
牛膝ヲ各ノ一斤　何首烏
右黒大豆ヲかさまぜ蒸て
大豆能蒸ル時取上ク
又生大豆ヲまぜ又蒸ことヲ
三度シて陰干粉ミ
小豆ノ大さ小丸シ三十粒

ぢく湯或ハ酒よて用ユ

○又方　枸杞酒　肝労面目
青く口苦く精神ほとと
なり物をらず
ことなうば或ハ月明をうざ
者などにわ
枸杞子一升酒二升右能
煮くたゞ其酒と用ユ
百九　無病延命の術
鳥獣よりも
へし鳥獣ハ飢て食し飽
てやゝ欲發して満し慾

をさまりてやむ
れバ腹乃満ふが上にも
飽食し月に
慾をさまりて
を求む是にて脾胃と
破り腎を損ず大半脾
腎乃虚多し神陽の業
とゐして火と助ぬ茶と用ユ
一さんハ其効あるやうなれど
大ハ本ら五藏にあると水ハ
一藏よわつてよ又火に
火とかけ水を乾し死のいろ

事と覚ゆ俗よ土佛の水
めそびとりふさしむべし

○百二十 救卒死方
薤を搗汁をとり鼻の
中に吹入べし

○又方 雞冠の血をとり鼻の
中へ吹入べし

○又方 猪の油卵一つほどに
酒一升入煎じ喉の中に吹
入べし

○又方 石菖蒲の根の生を
搗絞て其汁を鼻の
中へそそぎ入或は口の中へ
そそぎ入べし

○又方 卒死身よ熱あるよい
明礬とせんじ膝より下を
をひたすべし

○又方 卒死手足を人かきそ
小便をひねり
馬の糞一升水三升入煎
よせんじ洗てよし

○又方 暴に死ものの多は
疔毒なり燈火を近て炮
身をとろへし若小瘡あ
い急よ瘡よ灸とへし

多いよりこがくる色

百二十一　救溺死方　水よて死
郭公の黒焼鼻乃中よ吹
入るくすり

○又方　山雀の黒焼鼻乃中へ
ふるこしてやる

○又方　竈乃中の灰を取其
人頭ら足まて埋置ハ七
孔より水出るく甦

○又方　ゆこも大よ焼其人を
のぞくこのくすりあてる

○又方　皂莢さいかーのまゆを粉に

百二十二　旅立ちる者胡椒
を持事
毎朝胡椒二
三粒服して霍乱せず
冬用ゆき雪吹よあてぬるの

百二十三　他國へ行るの田螺
を持事肝油みて灶付
能干持へし先よて二三月
乃内右の田螺を用ゆきハ
水にあてらるぬるの或
い寒晒乃生姜をよう

百二十四　馬ノ汗大毒也食物自ナラヌヤウニヘヌヤウニヘ

百二十五　寒ノ内水ト服ス

寒三十日毎朝水二口三口服スレバ一切病ヲ生ゼズ目歯ニ甚芳也

百二十六　食傷ハ粥ヲ用ヘカラズ

飯事茶漬或ハ湯漬ヲ用テ吉

百二十七　病ハ食物ヲ用ル事

病ハ食物ヲ食ヒヒシヤクヒシヤクヘヌヤウニヘヌヤウニヘ泄瀉ヨイ病

とゝもろ茅等ヲ用ヘカラズ食物

百二十八　瘡ヲ病テ後七十五日ハ山椒ヤ物用ヒヘカラズ

瘡ヲ病テ後七十五日ハ山椒ヤ物用ヒヘカラズ食ベヘカラズ

百二十九　熱病ノ後七十日鯉ヲ食ヒヘカラズ

熱病ノ後七十日鯉ヲ食ヒヘカラズ

百三十　酒并焼酎ヲ飲湯ヨリ入ヒヘカラズ

酒并焼酎ヲ飲湯ヨリ入ヒヘカラズ

百三十一　鹿ヲ食ヒテ後ヨク歯ヲ損ヒテ有也

鹿ヲ食ヒテ後ヨク歯ヲ損ヒテ有也

百三十二　鳳仙花ハ歯ヲ損ヒヘカラズ

鳳仙花ハ歯ヲ損ヒヘカラズ

百三十三　玉簪
齒ノ毒ヘ食ベ

百三十四　初生ノ小兒齒ノ
ヘテ生ル事大吉相ナリ
然ト俗鬼子ト
くヘて是ヲ
哉理ヲ知ザル故ニ七夜立
テ齒自落テ後ハ常ノ
ゞ〳〵齒生ル
内ヘて初声ヲ出ヲ子ノ
是ヲ吉相ト能ヲ養ヒ月ヘ

百三十五　初生子尻ノ穴或ハ
女子ノ陰門ノ
生ルまゝ付ノ穴ありて
所ヲ
に生ル付ノ穴ありて
其所置時ハ大小便ハ
まゝ死ル
百三十六　小兒ト乳汁ヲ
ヘて養ヒ去ル
見損じ也愚醫
所ヽ　我朝ノ風俗
二歳ヨリ飯ヲ用味噌汁
ヘて餅ヲ煮テ

乳汁ハ折々用て穀の氣
と疎ゝ又ハ大人ゟ熱深
き小兒を厚く物と著せ
温水ー茶と用無理を
云て啼ハ機嫌よくで迎
ゆりとぞりこ
驚ろ風を催ふのこと
腰よりかね歩行ます避
て長ふかめるものハ是
ゟて大身なる人或ハ福有
る者或ハ愚醫の子ども
十人ゟ九人ハ物立かめるゟ

百三十七　墮胎之事

彼郭橐池傳と見ゝや
墮胎とすの事ハ不仁ノ
第一ゝて諸醫のよべき
業よゐ〳〵寸已ゝとを得ず
して破胎せんと欲ゝ
古今方茅數多あり是
唐日本共ゟ諸醫何様の
所に心を用さゐゝ誤ハ
こゝをたゞゝ試にうることを論
ぜん夫ゟ物腑胃
ゟ受ぞゆゝ事ゟ腑胃

能其物々の行處へ
ゆく恐ハ胎中の小兒を破
ん毒茉是を服しやう婦人
其毒にあてゝ
みてへ渙をさゝのく指茉
未う其前ハ胎
さゝ故よ犬に腕血をとる事
へ牛膝牛旁大根やう

物よう鹿麝香を少し其
先よ付れバ
大産ハ東
簡入致そこのひなら婦人
虚證よく安胎をなこ
ゝぞ墮胎せそとても安胎ゐ
ゐぐぞ實證なら婦人
此方能仕懸胎を墮とハ
秘結の人よ蜜導を指に
同し

まびくに云て十月に盆
生物の子を押返し辜甚不
仁の所為なり
若是非ざる戒へし戒へし
うべ前を去事ゆて聞引
百三十九　食物
有事と能々心を付へし
假令へ蓮實蓮根に心神
を養ひ毒なきものゝ如く然う
を大毒を含物なりとて是
と用ゐそして雞犬の人なた
ら雞の二六ノ時をきりめ

大へ能あり
人の又是と
然るに味の
殺し食是大なる罪人と
殺生の同じ
益有物と人
大なる差別
悪食を好者の其報ひて
悪病を受短命ゆく来
世を阿鼻地獄へ墮在
子孫を絶へし此を
戒へし

の家と守ほ
憐みて家と飼

百四十 食合ノ事 七其

蕎麥ハ 猪羊
粟ハ 杏仁
鮒ハ 砂糖
酸ハ 茯苓 冊參
韮ハ 蜜 牛肉
大蒜ハ
芥菜ハ 兎 鯽魚
地黃ハ大根 生姜 葱白
李ハ 蒼木 白朮
桃ハ 蒼朮
杷ハ
棘

楊梅ハ 生葱
鯉ハ 天門冬 朱砂 紫蘇
鰻鱺ハ 銀杏
鯨ハ 荊芥
鯖ハ 葱
鳥ハ 胡桃 木耳
雞ハ 蕎麥 胡桃 菌
木耳 鯉 生葱 糯米
河豚ハ石首魚 荊芥 菊花
枯梗 茸 附子 鳥頭
蠶ハ 莧

二二

李よ　砂糖
雀よ　白木
豕よ　梅　李
狗よ　韮　蕎麦
羊よ　半夏　菖蒲

なんぢよ　串柿

このねよ　うなぎ　かめ
猪の肉水よ落て浮もの
食ふ色々

自死そうろう鳥獣魚ロを閉
その食ふべからず

諸民妙薬方終

東都　一関屋